

日本語に適合したハングル表記法

平木 孝典

倉敷芸術科学大学 インターナショナルセンター

(2013年10月1日 受理)

1 はじめに

グローバル化・国際社会において、駅や観光地などでの外国語表記が英語、中国語に加えて、韓国語も目にするようになってから久しい。当初は、日本での漢字をそのままハングルに置き換えた表記(例: 出口/출구: 直訳「出口」)であったが、現在は韓国でのハングル表記(出口/나가는 곳: 直訳「出て行く所」)に改めつつあるようである。こうした韓国語は、専ら韓国人のための便宜を図ってのことであるが、日本に目を移すと、テレビや映画など、マスメディアを通じて韓国語を耳にする機会が少なくない。映画などは、翻訳された字幕を見れば、特に韓国語の知識は要求されないかもしれないが、身近に韓国人がいる場合は、どうしてもハングルで名前を呼ぶこともある。例えば、「全」という人の韓国での呼び名は「ジョン」であるが、公的な文章などでのアルファベット表記は「Jeon・ジョン」となる。つまり、実際の発音と表記上の発音が異なるわけである。

学校法人加計学園の「加計」の漢字語についても、加計グループの各大学のHP(言語: 韓国語)には「카계, 가계, 가계」の3種が見える。これをカタカナで表記すると、「カケ、ガケ、ガケエ」となるが、誰がどのように読んでも、加計学園の加計は「カケ」でしかないことは言うまでもない。⁽¹⁾これは訳者の言語観にもよるが、日本語のカタカナとハングルの対照を示す元になる韓国の、現行のハングル表記規範(以下、現行表記法: 1986年1月7日、韓国文教部【部は日本の省に相当】告示第85-11号「国際音声記号とハングル対照表」. 原文は韓国語. 「국제 음성 기호와 한글 대조표」/表1参照)にその問題の一因があるようである。⁽²⁾

「加計・カケ」のハングル表記である「카계, 가계, 가계」での最初の「카계/カケ」は、音声的表記方式として、ハングルを聞いて、その音のまま表記したものであるため、日本語の原音に近いが、二番目の「가계/ガケ」は、現行表記法での「가계」のアルファベット表記の[gake]に対応するため、原音とは異なる。同様に異なる三番目の「가계/ガケエ」は機械翻訳によるものなので、本稿の対象外ではあるが、漢字をそのままハングルに変換したため、「加計」の「計」を「ケエ(語頭に来る場合はケエ)」と訳されている。

このように現行表記法は、後述するように、日本語と韓国語とで、音韻体系と発音習慣が互いに違っているにもかかわらず作成されたため、現実の日本語の音を忠実に反映しているとは言えない。そのため、韓国人日本語学習者の発音教育を歪め、違和感のある発音

につき、場合によっては日本人とのコミュニケーションに支障を来すこともある。

本稿は、このような日本語のハングル表記における不統一な表記実態が、現在、韓国で用いられているハングルの日本語表記法にその問題があるとし、問題点の原因を音声・音韻論的な言語学の立場から明らかにし、日本語に適合したハングル表記法の試案を提示するものである。

<表1. 国際音声記号とハングル対照表>

| 国際音声記号 | 子音 | | 半母音 | | 母音 | |
|--------|-------|--------|--------|------|--------|------|
| | ハングル | | 国際音声記号 | ハングル | 国際音声記号 | ハングル |
| | 母音の前 | 子音前・語末 | | | | |
| P | ㅍ | ㅍ, ㅑ | j | 이 | I | 이 |
| B | ㅂ | ㅂ | ɥ | 위 | Y | 위 |
| T | ㅌ | ㅌ, ㅑ | w | 오, 우 | e | 에 |
| D | ㄷ | ㄷ | | | ø | 외 |
| K | ㅋ | ㅋ, ㅋ | | | ɛ | 에 |
| g | ㄱ | ㄱ | | | ɛ̃ | 앵 |
| F | ㅍ | ㅍ | | | æ | 외 |
| V | ㅂ | ㅂ | | | æ̃ | 앵 |
| θ | ㅍ | ㅍ | | | æ | 애 |
| ð | ㅂ | ㅂ | | | a | 아 |
| S | ㅍ | ㅍ | | | ɑ | 아 |
| Z | ㅍ | ㅍ | | | ã | 앙 |
| ʃ | ㅍ | ㅍ, 시 | | | ʌ | 어 |
| ʒ | ㅍ | ㅍ | | | ɔ | 오 |
| ts | ㅌ | ㅌ | | | ɔ̃ | 옹 |
| tʃ | ㅌ | ㅌ | | | o | 오 |
| ʈ | ㅌ | ㅌ | | | u | 우 |
| ɕ | ㅌ | ㅌ | | | ə | 어 |
| M | ㅍ | ㅍ | | | ə̃ | 앵 |
| N | ㄴ | ㄴ | | | | |
| ɲ | ㄴ | ㄴ | | | | |
| ŋ | ㅇ | ㅇ | | | | |
| L | ㄹ, ㄹㄹ | ㄹ | | | | |
| R | ㄹ | ㄹ | | | | |
| H | ㅎ | ㅎ | | | | |
| ç | ㅎ | ㅎ | | | | |
| X | ㅎ | ㅎ | | | | |

2 ハングルとは何か

本論に入る前に、韓国語のハングルについて、若干、予備知識を得ておきたい。ハングルは1446年に、李氏朝鮮第4代国王の世宗が、「訓民正音」の名で公布した表音文字であるが、その構造は、宇宙を形成している天、地、人の、易学でいう三才を基本として、「・」「一」「丨」の3文字に象形化したものである。子音（陰）にあたる「・」は、口や舌、歯などの状態を造型化した、発音器官の象形形である「ㅇ」に変化し、母音（陽）の「一」「丨」は、その組み合わせから「ㄱ」が作られ、「ㅇ」+「ㄱ」からハングルの「ㅇ」になるという、陰陽思想の三才の象形文字である。⁽³⁾このようなハングル文字は、母音と子音が組み合わせられて一つの文字を形成するが、子音の位置は左側と上にあり、母音はそれに対応する形で右側と下にある。例えば、子音の「ㄴ」に母音の「ㅏ」を組み合わせると、「私」を意味する「나」になる。同様に、子音の「ㅍ」に母音の「ㅏ」を組み合わせると、名前の

<表2. ハングル表>

| 母音 (10種) | | | 二重母音 (11種) | | |
|-------------|------|--------------------|------------|------|---------------|
| 表記 | ローマ字 | 発音 | 表記 | ローマ字 | 発音 |
| ㅏ | a | [a] “ア” | ㅑ | ae | [ɛ] “エ” |
| ㅓ | ya | [ja] “ヤ” | ㅓ | yae | [jɛ] “イエ” |
| ㅗ | eo | [ɔ] “オ” 「ア」と「オ」の間 | ㅛ | e | [e] “エ” |
| ㅜ | yeo | [jɔ] “ヨ” 「ヤ」と「ヨ」の間 | ㅜ | ye | [je] “イエ” |
| ㅛ | o | [o] “オ” 唇を尖らせて | ㅜ | wa | [wa] “ウ” |
| ㅠ | yo | [jo] “ヨ” 唇を尖らせて | ㅟ | wae | [wɛ] “ウエ” |
| ㅜ | u | [u] “ウ” 唇をかなり尖らせて | ㅟ | we | [we] “ウエ” |
| ㅠ | yu | [ju] “ユ” | ㅠ | wo | [wc] “ウオ” |
| ㅡ | eu | [ɰ] “ウ” 唇を平らにして | ㅠ | we | [we] “ウエ” |
| ㅣ | i | [i] “イ” | ㅡ | wi | [wi] “ウイ” |
| | | | ㅢ | ui | [wi] “ウイ” |
| 子音 (平音・10種) | | | 子音 (激音・4種) | | |
| 表記 | ローマ字 | 発音 | 表記 | ローマ字 | 発音 |
| ㄱ | g | [k/g] 日本語のカ行音 | ㅈ | ch | [tʃ h] スの激音 |
| ㄴ | n | [n] 日本語のナ行音 | ㅋ | k | [kh] ㄱの激音 |
| ㄷ | d | [t/d] 日本語のタ行音 | ㅌ | t | [th] ㄷの激音 |
| ㄹ | r/l | [r/l] 日本語のラ行音 | ㅍ | p | [ph] ㅍの激音 |
| ㄴ | m | [m] 日本語のマ行音 | 子音 (濃音・5種) | | |
| ㅂ | b | [p/b] 日本語のバ行音 | ㄱ | kk | [k'] ㄱの緊張音 |
| ㅅ | s | [s] 日本語のサ行音 | ㅋ | tt | [t'] ㄷの緊張音 |
| ㅇ | /ng | [無音/ng] 日本語のア行音 | ㅍ | pp | [p'] ㅍの緊張音 |
| ㅈ | j | [tʃ/dʒ] 日本語のチャ行音 | ㅍ | ss | [s'/ɕ'] ㅍの緊張音 |
| ㅎ | h | [h] 日本語のハ行音 | ㅈ | tch | [tʃ'] スの緊張音 |

※ローマ字は2000年韓国文化観光部告示第2000-8号「国語のローマ字表記法」(原文は韓国語。「국어의 로마자 표기법」)による。

「趙」を意味する‘조’になる。これに助詞「は」の‘는’に助動詞「です」の‘입니다’を組み合わせると、‘나는 조입니다」[私は趙です]という文が出来上がる。もし名前が「金」さんの場合は‘김’と表記するが、これは子音の‘ㄱ’‘ㄴ’の二つに母音の‘ㅣ’の合字である。ところで、子音の二つの内の‘ㄴ’は、常に下に位置し、下接音を変化させる「パッチム」と呼ばれる終声の子音である。‘ㄱ’が左上に、母音の‘ㅣ’が右上に、そして‘ㄴ’が下にあり、‘김’となるが、発音は初声‘ㄱ’、中声‘ㅣ’、終声‘ㄴ’の三声からなり、発音順序もこの流れである。しかし、日本人の場合はどうしても「キム」と言ってしまうが、‘김’は[kim]であって[kimu]ではない。ハングル文字は一文字が音節ごとに纏められた一単音を示す音素文字なので、[mu]の[u]を音にしないで、[m]と発音したときに、口唇をそのまま閉じれば[kim]の発音になる。こうしたパッチムをとる子音は16個あり、二重子音を含めると27個にのぼるが、発音は7通りである。

その他、音節構造や母音調和、用言の活用などについても触れなければハングルの全容

<表3. パッチム (終声) の種類>

| 子音・二重子音 | 発音 |
|---|--------|
| ㄱ (g/k), ㅋ (k), ㄱㄱ (kk), ㄴ (gs), ㄴ (lg) | ㄱ [k'] |
| ㄴ (n), ㄴ (nj), ㄴ (nh) | ㄴ [n] |
| ㄷ (d/t), ㅅ (s), ㅅ (ss), ㅈ (j), ㅈ (ch), ㅌ (t), ㅎ (h) | ㄷ [t'] |
| ㄹ (l), {ㄹ (lb)}, ㄹ (ls), ㄹ (lt), ㄹ (lh) | ㄹ [l] |
| ㄴ (m), ㄴ (lm) | ㄴ [m] |
| ㅂ (b/p), ㅍ (p), ㅂ (bs), {ㅂ (lb)}, ㅍ (lp) | ㅂ [p'] |
| ㅇ (ng) | ㅇ [ng] |

が掴めないが、ここでは本稿の趣旨上、ハングル文字の構成と発音表記のみに止める。

3 日本語と韓国語の音韻体系

日本語の音韻は閉音節もあるが、閉音節は特殊な環境に限られ、多くは母音で終わる開音節中心の言語⁽⁴⁾であり、発音は「か」や「た」といった無声音と、「が」や「だ」といった有声音の区別がある。また日本語は五十音プラス濁音／鼻音／撥音／促音など約110のモーラ(拍)を持つが、「あ」「い」「う」「え」「お」「ゃ」「ゅ」「ょ」といった小書きの仮名は1モーラとならず、長音「ー」は、理論上は1モーラの長さで規定され、アクセントは高低アクセントである。

韓国語の音韻は閉音節言語であり、無声音と有声音の区別はなく、ともに同一の音と認識する。例えば、日本語の「金閣寺・きんかくじ」と「銀閣寺・ぎんかくじ」は同一の単語に聞こえ、その区別が極めて困難である。その一方で、日本語にはない平音／激音／濃音という有気音と無気音の対立があるが、これらの音は呼気の強さや喉の緊張の度合いによって相互に異なる音と認識される。また、韓国語は、母音は基本母音が10個、合成母音が11個の計21個、子音は基本子音が14個、合成子音が5個の計19個で、合計40個だが、1音節は子音＋母音、あるいは子音＋母音＋子音で1音節になるので、約2000ものモーラを持ち、アクセントは強弱アクセントである。

このように、日本語と韓国語の音韻体系を鳥瞰すると、音節や言語音、モーラなどに多くの異なりが見える。こうした差異点を、次に詳しく見ていくことにする。

<表4. 日本語と韓国語の音韻体系>

| 区分 | 音節 | 言語音 | モーラ | アクセント |
|-----|-----|---------------|-----------|---------|
| 日本語 | 開音節 | 「無声音」「有声音」の区別 | 約110のモーラ | 高低アクセント |
| 韓国語 | 閉音節 | 「有気音」「無気音」の区別 | 約2000のモーラ | 強弱アクセント |

3-1 音声的表記と音素的表記

音声とは、人間が意思疎通のために、具体的に交わす音である。例えば、[bo]の子音は唇を閉じてから開く破裂音であるといった言語音であり、その最小単位は単音である。

音声的表記とは、外国語を聞いたままに表記する方式であるが、外国語の実際の音のまま表記するため、より原音に近くなる。しかし、外国語を聞いて、それに近い自国語として表記するため、二つの言語が似た音韻体系である場合は問題はないが、互いに違った音韻体系の場合は、自国語では区別できなく、一つに表記するか、または自国語では異なった音素のために、一つの音素から出る異音などをすべて表記するとなると、二種類以上に表記されることになる。例えば、[r] および [l] という2音は、音声学上は別々の音であるが、日本語の中で用いる場合は、「そら(空)」を[sora]と発音しても[sola]と発音しても別語にはならない。したがって、日本語では音韻論上、[r] および [l] を区別せず、音韻論上の音素表記では /r/ と記している。/r/ は、場合によって、また人によ

て [r], [l], [r], [ɾ] などさまざまに発音されるが、その違いは日本語の音韻としてはほとんど問題にならない。

音素とは、言葉の意味を弁別する働きを持った音の、意味に関与しない部分を取り去った抽象的な最小単位である。例えば、「霧」/kiri/ と「義理」/giri/ は、それぞれ異なる意味を持っているので、この区別をしている /k/ と /g/ は、それぞれ日本語において独立した音素となる。後述するが、韓国語では、[k] は語頭に現れ、[g] は語中に現れ、両者は意味の区別に関与しない。

音素的表記は、意味の区別に関与する互いに異なる音同士の区別に重点を置くため、実際の音であっても、音韻論的な区別が不必要な場合は、これを表記に反映させない。従って、一音一表記の簡略で、似た音同士の統一した表記方式として括られるところから、機

＜表5. 「ローマ字のつづり方」第1表＞

| | | | | | | | |
|----|------|------|-----|-----|-------|-------|-------|
| a | i | u | e | o | | | |
| ka | ki | ku | ke | ko | kya | kyu | kyo |
| sa | si | su | se | so | sya | syu | syo |
| ta | ti | tu | te | to | tya | tyu | tyo |
| na | ni | nu | ne | no | nya | nyu | nyo |
| ha | hi | hu | he | ho | hya | hyu | hyo |
| ma | mi | mu | me | mo | mya | myu | myo |
| ya | (i) | yu | (e) | yo | | | |
| ra | ri | ru | re | ro | rya | ryu | ryo |
| wa | (i) | (u) | (e) | (o) | | | |
| ga | gi | gu | ge | go | gya | gyu | gyo |
| za | zi | zu | ze | zo | zya | zyu | zyo |
| da | (zi) | (zu) | de | do | (zya) | (zyu) | (zyo) |
| ba | bi | bu | be | bo | bya | byu | byo |
| pa | pi | pu | pe | po | pya | pyu | pyo |

械的处理方式を簡略にして容易にさせることができる。但し、その表記のまま読んだ時は、原音と距離が生じる。

音声的表記と音素的表記の具体的な例として、日本語のローマ字表記方式がある。日本語のローマ字表記方式としては、大きく音声的表記方式であるヘボン式と音素的表記方式である訓令式の二種類に分けられる。

文部科学省は、1954年に「ローマ字のつづり方」(内閣告示第一号/表5参照)を定めたが、現在も日本国内の標準として公に認められているローマ字表記は、この1954年の訓令式であり、こ

れを基に国際規格 (ISO 3602) が1989年に承認され、国際標準も訓令式となっているが、実際は両表記の混在がみられる。⁽⁵⁾

例えば、農林水産省のHP (<http://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/tanbou/chiba.html>) 「千葉県山村探訪」を見ると、千葉県の「千葉」のローマ字表記は [chiba] とあるが、関東農政局のHP (<http://www.maff.go.jp/kanto/kids/prefecture/tiba.html>) のそれは [tiba] とある。これは、前者がヘボン式表記であり、後者が訓令式表記となる。

具体的に見ていくと、日本語の「シ」や「チ」は口蓋音として、その音価は [ʃi] [tʃi] であり、英語では、これらの音に該当する表記は [shi] [chi] である。そのため、実際の音のまま表記しようとする、ヘボン式では日本語の「シ」は [shi] に、「チ」は [chi] として表記することになり、同じように「ツ」は [tsu] に、「フ」は [fu] と表記する。しかし、このようにすると、日本語のサ行は [sa, shi, su, se, so]、タ行は [ta, chi,

＜表6. ヘボン式と訓令式＞

| ローマ字表記 | サ行 | タ行 | ハ行 |
|--------|-----------------|------------------|----------------|
| ヘボン式 | sa shi su se so | ta chi tsu te to | ha hi fu he ho |
| 訓令式 | sa si su se so | ta ti tu te to | ha hi hu he ho |

tsu, te, to]、ハ行は [ha, hi, fu, he, ho] と表記され、各行のイ段、ウ段の表記が統一されない。これらに対して訓令式では、サ行は [sa, si, su, se, so]、タ行は [ta, ti, tu, te, to]、ハ行は [ha, hi, hu, he, ho] となり、各行内の表記に統一性が維持される(表6参照)。

ところで、日本語には、[si] [ti] [tu] という音が存在しないため、[si] と [ʃi]、[ti] と [tʃi]、[tu] と [ts] は音素的に対立しない。「外来語の表記」(1991年内閣告示第2号)では「スイ、テイ、トゥ」と表記するが、「シ」は [si] に、「チ」は [ti] に、「ツ」は [tu] に表記しても、単語の意味区別には問題にならないため、各行内の表記を統一させる立場にある。同じように「フ」は [hu] に表記される。従って、単純に統一された表記は可能であるが、この表記だけのままで読むと、原音とは異なった音になる。例えば、「チーム」を「チーム」、「チケット」を「チケット」と読む場合である。ヘボン式も同様に、例えば、外務省が「オ」段に限って [h] の付加を認めているが、「幸運」[koun] のつもりが「古墳」[kohun] に思われる場合があるし、「町」[machi] の読みも、アメリカ人なら「メチ」、フランス人なら「マシ」、ドイツ人なら「マヒ」、イタリア人なら「マキ」と発音されるであろう。

ハンダルの場合は、ヘボン式、訓令式というローマ字表記の違いはなく、音声的表記(表2参照)の立場⁽⁶⁾で示される。例えば、「カット」[cut] は「컷트」[khctʰw]、「ランチ」[lunch] は「런치」[rcnt ʃ hi] と発音するが、次に触れる音韻体系に大きな相違点がある。

3-2 音韻体系の相違点

日本語の母音である「アイエオ」に対する韓国語の「아이에오」は、互いに似た言語環境での発音につき、相互の対応が容易である。しかし、韓国語の母音で一つ抜けている「으」、「우」に相当する日本語の「ウ」は、英語などの [u] のような円唇後舌母音より少し中舌寄りで、それに伴い円唇性が弱まり、中舌母音のような張唇でも円唇でもないニュートラルな唇か、それよりほんの僅かに前に突き出した唇で発音される半後舌微円唇狭母音であるため、韓国語の中舌母音の「으」と円唇後舌母音の「우」の中間的存在の音になっている。ただ、「ス、ズ、ツ」の母音は中舌化されたものなので、韓国語の「으」と類似した音のようである。

その他にも両国語の母音体系の重要な相違点としては、長音と母音の無声化現象がある。長音については、後述する「特殊音素」の項目で触れることにするが、母音の無声化現象とは、「あした [ashita]」、「がくせい [gakusei]」のように、[shi]、[ku] の母音

を、口構えだけ残して、声帯を振動させず、息だけで発音する現象（例外はある）であるが、日本語の発音習慣として、これを韓国語の表記に置き換えることは不可能である。

子音体系についての、日本語と韓国語の根本的な相違点は、頭子音にあって、日本語が無声音と有声音の対立により、最小対立語（例：金・キン、銀・ギン）をつくるに比し、韓国語では無気音と有気音の対立により、無気音は更に軟音と硬音によって、最小対立語（例：달 [tal] 月. 탈 [thal] お面. 딸 [t'al] 娘）をつくるどころにある。

ところで韓国語の破裂・破擦音の軟音は、語頭に来的时候は無声音だが、母音の後には有声音しか現れないというルールがある。すなわち、韓国語での無声音と有声音は単語の意味区別には関与しない、同一の音素に属する異音とみなし、その表出は位置によって異なる相補的分布を成す音である。

<表7. 日本語の子音体系>

| | 無声音 | 有声音 |
|-------------|--------------|-------------|
| | カ行 [k] | ガ行 [g] |
| タ, テ, ト [t] | ダ, デ, ド [d] | |
| パ行 [p] | バ行 [b] | |
| サ行 [s] | ザ行 [z] | |
| 破擦音 | チ [tʃ] ツ [s] | ジ [ʧ] ズ [ʤ] |

<表8. 韓国語の子音体系>

| | 無気音 | | 有気音 |
|-----|-----------|---------|---------|
| | 軟音 | 硬音 | |
| 破裂音 | ㄱ [k, g] | ㅋ [k'] | ㅋ [kh] |
| | ㄷ [t, d] | ㅌ [t'] | ㅌ [th] |
| | ㅂ [p, b] | ㅃ [p'] | ㅃ [ph] |
| 摩擦音 | ㅅ [s] | ㅆ [s'] | - |
| 破擦音 | ㅈ [tʃ, ʧ] | ㅉ [tʃ'] | ㅉ [tʃh] |

このため、ハングルでは、有声音の [b] [d] [g] 及び [ʧ] は語頭に來ることがないため、韓国人にとって濁音で始まる日本語が発音しにくく、また聞き取りにくい。例えば、「あの人、ダさいね」と言ったつもりが、「あの人、多才ね」と言ってしまうように、「だ」[d]、「た」[t] の区別が難しい。語中にあっても、「韓国から来た」と言ったつもりが、「監獄から来た」と言ってしまうように、「kankoku」の [k] が [kangoku] の [g] になり、「どうぞ」と言ったつもりが、「どうじょ」になってしまうのは、摩擦音に有声音の [z] がなく、破擦音の [ʧ] を代用させた結果、生じた発音である。

また、子音の中でも「ツ」は、韓国人にとって難しい発音の一つになっている。高（高1999：24）は「ツ」について、「凡そ韓国語のㅈとㅉの中間程度の発音と言えるが、韓国人にはㅈよりはㅉの方に近いと思われる」（原文は韓国語）という指摘があるように、「ツ」の発音を「ㅈ」とする現行表記法に疑問を呈している。

一方、日本人は韓国語の軟音と硬音、そして、有気音の区別が難しい。しかしながら、日本語に硬音と有気音などが全くないのかと言うとそうでもない。（例：硬音：促音の「っ」や有気音の「パン」）日本語にも韓国語の硬音とか有気音に近い音の表出があるが、こうした音は無声音の異音として、単語の意味区別に関与しないため、区別する必要がない。

3-3 特殊音素

日本語には、単独では発音できない異なった音に付いてこそ発音されるものがあるが、異なった音と同様に一拍の長さでアクセントを持つ音がある。これを特殊音素と呼び、撥

音/促音/長音がある。日本語の音韻論では、単位の設定を巡って、これら特殊音素を「モーラ」(拍)という用語を用い、異なった音と同様に1モーラとするのが一般的である。

撥音「ン」(/N/)は、後続の音によって [n] [m] [ŋ] などの子音となる(ただし、母音の前では鼻母音となる)。例えば、「あんま(按摩)」「あんだ(安打)」「あんか(行火)」の3つの語の発音を比べてみると、後続音によって、「ん」で示される部分の発音はそれぞれに異なる。「あんま」の場合の「ん」は、上下の唇を閉じた状態で発音される両唇音で、[m] で表される。「あんだ」の「ん」は、舌先を歯茎の裏側に当てた状態で発音される歯茎鼻音、[n] であり、「あんか」の「ん」は、舌の奥の方を軟口蓋と言われる部分に当てた状態で発音される軟口蓋鼻音、[ŋ] で表される。また、「ペン」「本」などの語末及び文末で発音される口蓋垂鼻音、[N] もある。この中で語末・文末に現れる口蓋垂鼻音 [N] と母音・半母音・ハ行などの前に現れる鼻母音は、韓国語にはない音である。

促音「ッ」(/Q/)も、後続音によって、[k̚k̚] [-s̚s̚] [-ɸ̚ɸ̚] [-t̚t̚] [-t̚t̚] [-t̚t̚] [-p̚p̚] などの子音連続として現れるが、ただし「あっ」のように、単独で出現することもあり、そのときは声門閉鎖音となる。

撥音と促音は、単独としては発音されず、前の音に付いたときだけ発音する点は、韓国語のパッチムに似ているが、異なった音と同様に1拍の長さアクセントを持つという点で、韓国語のパッチムとは、その性格が異なる。韓国人は、これら撥音と促音を正確に発音することが難しいが、その一因は、拍を無視して、韓国語のパッチムのように発音するためのようである。

日本語の長音(/R/)も1拍の長さアクセントを持つが、その点、他言語の長音とはその性格が若干異なる。英語などの言語では、長音は一つの音節内に含まれるが、日本語では、「岡さん/名前」(オカサン)と「お母さん」(オカーサン)のように、長音の有無により意味を弁別する重要な要素になっている。ただし、音声としては「長音」という特定の音があるわけではなく、長母音 [ä:] [i:] [u:] [e:] [o:] の後半部分に相当するものである。

この点、韓国人日本語学習者は、前川(前川, 1997: 174)によると、「伝統的な韓国語(ソウル方言)には母音の長短の対立が語頭の位置に限って生じるという形状素性が存在した。そのような言語を母語とする者は語頭に比べて語中における長短の知覚が不得手であろうと予想される。」⁽⁷⁾と述べているように、例えば、「おばさん/大場さん/お婆さん」という、母音の音韻的な長短の対立に困難さが窺えるのは、韓国語の音声には、モーラという韻律単位が存在しないためである。但し、韓国語にも母音の長短の区別はある(例: ‘말’ [mal] 「馬」の意味は短めに“マル”と発音/“言葉”の意味は長めに“マール”と発音)が、しかし、この例で説明すると、「馬」の意味も「言葉」の意味も、同じ ‘말’ [mal] のため、意味の違いは表記上に現れることがない。⁽⁸⁾

4 まとめ

以上、本稿は、日本語と韓国語とが根本的に異なった音韻体系を持っているため、現行のハングル綴り方によっては、日本語の各音をハングルで表記することが困難であるとし、日本語の音韻体系の特性が反映されるように、新しい表記法作成に向けて考察した。

その結果、現行の表記法は、それなりに日本語を発音のまま表記するように作ったものではあるが、韓国語の音韻体系や発音習慣を強調したあまり、日本語の音韻体系の特性が無視されているのが、現行の表記法の問題点である。従って、改善の大枠としては、現行の表記法の枠を維持しながらも、日本語の一つの表記はハングルとしても一種類の表記で書かれ、原音に近い発音のままに表記されることが望ましい。

先ず母音では、「アイエオ」の各段は、「아이에오」と、一対一に対応されるため問題はないが、「오」のウ段の場合は「ス、ズ、ツ」が、各々「으, 즈, 츠」に表記され、異なったウ段の表記である「우」（例；ス→우, ズ→우, チュ→우など）には統一しない。一方、日本語での「오」と「우」の音は、音素的には対立しないため、ここでは問題にならない。

子音では、現行の表記法では日本語の無声音である「カキケコ」と「タチテト」を、語頭では「가기구게고」と「다지테도」に、語中・語末では「카키쿠케코」と「타치테도」に書き表す規定がある。これは韓国語の発音習慣に合わせた表記法であるが、前述したように、韓国語の破裂軟音（ㄱ, ㅋ, ㆁの音）と破擦軟音（ㅃの音）は、語頭に来たときは有声音として発音されることなく、有声音と有声音の間では有声音として発音される場合が多いため、語頭の日本語の無声音を「ㄱ, ㅋ, ㅃ」に、語中の無声音を有気音である「ㅋ, ㅍ, ㅌ」に分けて表記する。しかし、このような方式は、一つの音を語頭と語中に区分しなればならない不便さを齎すだけでなく、語頭で日本語の無声音と有声音が区別できず、それをどのようにハングル表記に反映させるかが問題になる。これについては、発音のまま書くという原則だけでは表記上に混乱が起きるので、日本語の破裂有声音は韓国語の軟音として、無声音は有気音として表記するのが望ましい。

日本語の有声音中、ガ行は「가기구게고」に、ダ行の「다데도」は「다테도」に、パ行は「바비부베보」に表記されるが、この表記方式は、語中の有声音の場合は問題がないが、語頭の有声音の場合は、表記のまま読むと意味が違ってくる。例えば、金（キン）と銀（ギン）が語頭に来的时候は、すべて [kin] として表記されるので、ハングルの表記だけでは、単語が区別できない。破擦音の「ㄷ」の子音は、韓国語にはない音であるところから、正確に発音しにくい音の一つになっている⁽⁹⁾。韓国語では、これに似た音として「ㄷ」 [s'w] 「ㄷ」 [t'hw] 「ㄷ」 [w'w] があるが、「ㄷ」は、調音点では「ㄷ」と同じであるものの摩擦音であり、破擦音である「ㄷ」とは距離がある。「ㄷ」と「ㄷ」は共に濃音であるが、歯茎音（摩擦音）の「ㄷ」に対して「ㄷ」は硬口蓋音であり、「ㄷ」も硬口蓋音であるが、「ㄷ」とは阻害音（激音・濃音）の違いがある。語頭、語中の区別がない有気音である「치」を、硬口蓋歯茎破擦音の「치」に表記することと統一性を維持するためには、「ㄷ」

を‘ㄷ’に表記することが望ましい。韓国語にその子音がない日本語のザ行の各音中「ジ」は、語頭・語中の区別なく破擦音〔tʃi〕に発音されるので、これは韓国語の‘지’の音と似ているため、‘지’に表記することが望ましい。しかし、「ザ、ズ、ゼ、ゾ」の子音は、語頭では破擦音〔tʃ〕に、語中では摩擦音〔z〕に発音されるものの、これらは韓国語にはない音のため、‘자’ ‘지’ ‘즈’ ‘제’ ‘조’に表記するが、「ザ、ズ、ゼ、ゾ」とは距離がある。特に‘자’と‘조’は、その発音が〔tʃa〕、〔tʃo〕であるため、音やそれに似ているように発音される「ジャ」「ジョ」と混同される。また、現行の表記法では、日本語の直音である「ザ」と「ゾ」、そして、拗音の「ジャ」と「ジョ」、語頭に来る「チャ」と「チョ」が、すべて‘자’、‘조’で表記されるため、‘자’と‘자’、‘조’と‘조’が、一般的な対話体の発音では区別されないの、これらと区別できるように、「ジャ」と「ジョ」は‘자’、‘조’に表記し、同様に、‘주’に表記される「ジュ」と語頭の「チュ」も、‘쥬’、‘쥬’に表記されるのが望ましい。

次に、日本語の特殊音素中、撥音の「ン」については、次に来る音に従い、‘ㄴ’ ‘ㄹ’ ‘ㄹ’ ‘ㅇ’に区別するが、日本語では、これら〔n〕〔m〕〔ŋ〕の音は、音素的には対立されず、次に来る音によって異なり、発音される異音として、敢えて区別する必要がない音である。また、「ン」の異音中、語末・文末に現れる口蓋垂音の〔n〕や、母音・半母音・ハ行などの前に現れる鼻母音なども、韓国語にない音であり、音素的に対立しない。

促音の「ッ」は、後に来る音に従って、〔k〕〔t〕〔p〕〔s〕〔ʃ〕などの異音として現れる。韓国語には、これに対応されるパッチムの‘ㄱ’ ‘ㄷ’ ‘ㅂ’ ‘ㅅ’などがあるが、撥音の場合と同様に、異音を敢えて区分して書く必要はないと考える。

特殊音素中、長音の場合は、現行の表記法では日本語の長音を別途に表記していない。韓国語にも母音の長・短の区別はあるが、韓国語の長音は、一つの音節内に含まれるため、表記上には現れない。しかし、日本語の長音は、その有無が単語の意味の区別に関与するだけではなく、直前母音と同じ長さを持つという認識があるため、別途に表記するなど、重要な弁別要素となっている。現行の表記法では、このような日本語の長音の特徴は無視され、日本語の異なった言葉が韓国語の表記では同じ形態として現れることが少なくない。

現代の日本語では、エ段の後ろに来る「イ」は長音となり、現行の表記法ではこれを‘에이’と発音するが、次の例のように(例: 稽古/ケイコ→ケーコ、平成/ヘイセイ→ヘーセーなど)〔e:〕と発音され、長音が反映されるが、異なった長音も同様に反映させる必要がある。現代仮名遣いでの長音は、同じ段の母音に一字を加えて書き表し、〔a:〕はア段+ア、〔i:〕はイ段+イ、〔u:〕はウ段+ウ、〔e:〕はエ段+エ、〔o:〕はオ段+オに表され、エ段+イ、オ段+ウも長音として発音される。これらは、日本語の音韻変化により生じたもので、特にオ段+ウの形態(例: 東京/トウキョウ→トーキョー、農協/ノウキョウ→ノーキョーなど)は、実際に、音声的には‘오’〔o:〕より‘어’〔e:]に発音されるため、‘어’の表記が、より日本語の発音に近くなる。

以上、考察した現行の表記法の問題点について改善点を整理すると、次の表(表9)になる。

<表9. 日本語・ハングル表記法改善案>

| 仮名 | ハングル | | | |
|--|--|---|--|---|
| | 現行 | | 改善案 | |
| | 語頭 | 語中・語尾 | 語頭 | 語中・語尾 |
| アイウエオ カキクケコ ガギグゲゴ サシスセソ ザジズゼゾ タチツテト ダヂヅデド ナニヌネノ ハヒフヘホ バビブベボ パピプペポ マミムメモ ヤユヨ ラリルレロ ワ ン | 아이우에오 가기구게고 가기구게고 사시스세소 자지즈제조 다치쓰테토 다지즈데도 나니누네노 하히후헤호 바비부베보 파피푸페포 마미무메모 야유요 라리루레로 와 오 | 카키쿠케코 타치쓰테토 ㄴ | 카키쿠케코 타치즈테토 ㄴ | (オ段後ろのウ) 어 카키쿠케코 타치즈테토 (バッチム) ㄴ, ㄹ, ㄹ, ㄹ |
| キャキュキョ ギヤギユギョ シャシュシヨ ジャジュジョ チャチュチョ ヒヤヒユヒョ ピャピュピョ ピャピュピョ ミヤミュミョ リヤリュリョ | 가 규 교 가 규 교 샤 슈 쇼 자 주 조 자 주 조 하 휴 효 파 뷰 표 파 퓨 표 마 뮤 묘 라 류 료 | 카 규 교 차 추 초 류 료 | 카 규 교 차 슈 초 차 유 초 류 료 | 카 규 교 차 슈 초 차 유 초 류 료 |

※記入されていない箇所は、現行の「語頭」と同一。

注

- (1) 加計グループ内では、吉備国際大学のHPに、「吉備」のハングル表記が「키비,기비,길비」とある。カタカナに直すと、「キビ、ギビ、ギルビ」となり、三種の読み方が混在している。
- (2) 韓国の言語規範としては現在、次の四つがある。外来語表記法(외래어표기법) 1986年文教部告示第85-11号。ハングル綴字法(한글철자법) 1988年文教部告示第88-1号。標準語規定(표준어규정) 1988年文教部告示第88-2号。国語のローマ字表記法(국어 로마자 표기법) 2000年文化観光部告示第2000-8号【部は省に相当】。尤も、ハングルのカタカナ表記自体に問題を呈する主張がある。「韓国語は日本語より音韻数が多く、音節構造も複雑なため、日本語のように主に変異音をローマ字で表記することは不可能なことと考えられる。」(金, 1983: 36. 原文は韓国語)
- (3) ハングル文字に似た神代文字の1つに阿比留文字と呼ばれる古代文字がある。書体は横組みと縦組みからなり、その構成はハングルと似通った文字種であるが、出現はひらがな・カタカナが使われる以前に日本人が使用していた文字と言われているものの、いつ頃作られたかを示す資料は不明である。吾郷によると、アヒル文字とハングルとが同一ルーツであるかのような論を説いている。「原始諺文が

あって、一部が日本に来て、日本人の言葉に合うように転作されたのが、アヒル文字なんです。朝鮮語に合うようにしたのが諺文。いわゆる今のハングルですね。」(吾郷, 2000 : 73-74)

- (4) 窪菌によると、母音体系について、「日本語に5つしか母音がないということは、日本語話者が5つしか母音を発音できないということの意味しているのではない。個々の発音としての母音の数は無数」であって、「多様な音が存在する。」という主張がある。(窪菌, 1998 : 33)
- (5) 旅券の氏名記載の原則は「ヘボン式ローマ字」と定められている。旅券法施行細則法第五条第二項「氏名はヘボン式ローマ字によって旅券面に表記する。ただし、申請者がその氏名についてヘボン式によらないローマ字表記を希望し、外務大臣又は領事官が、出生証明書等により当該表記が適当であり、かつ、渡航の便宜のため特に必要であると認めるときは、この限りではない。」
- (6) 韓国人の名前のローマ字転写は、各個人が自分で決める慣習になっている。韓国の『国語学年鑑』(国立国語研究院 1997)によると、「李」さんの場合は、[LEE. Lee. YI. Yi. Rhee. Li] のどれでも良いことになっている。
- (7) 権によると、「ある韓国人日本語学習者は、普段の会話では長短音を区別して会話しているが、おかしいことに地名とか固有名詞になると区別できない」とし、その原因を、「高校生の時からインターネットなどを通じた日本の地名といった情報を韓国語の表記法で慣れてしまったので、それが癖になってしまった」(権, 2010 : 342. 原文は韓国語)とする分析がある。
- (8) 母音の音韻的な長短の対立について、李は、「長母音については表記しない」(李, 1994 : 331. 原文は韓国語)という立場を採るため、韓国語の場合の意味の違いは表記上に現れることがないところから、「キユウシュウ(九州)」は「규슈・キュシュ」、「ニイガタ(新潟)」は「니가타・ニガタ」に表記されると説明する。
- (9) 中島の調査によると、韓国人母語話者 23 名に対し、「ツ」の発音をチェックしたところ、正答率は 26.1%であった。(中島, 2002 : 132)

阿比留(アヒル)文字 五十音表

| ン | ウ行 | ラ行 | ヤ行 | マ行 | ハ行 | ナ行 | タ行 | サ行 | カ行 | ア行 |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ㄴ | ㅇ | ㄹ | ㄷ | ㅌ | ㅍ | ㅍ | ㅌ | ㅊ | ㅋ | ㆁ |
| | ㅁ | ㅂ | ㅃ | ㅅ | ㅆ | ㅇ | ㄷ | ㄷ | ㅌ | ㅁ |
| | ㅅ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ | ㅆ |
| | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ | ㅇ |

<参考文献>

- 吾郷清彦(2000)『古神道入門』タチバナ出版. pp.73-74.
- 窪菌晴夫(1998)『音声学・音韻論』くろしお出版. p.33.
- 中島仁(2002)「現代朝鮮語の言語規範」『語学研究所論集第7号』東京外国語大学. p.132.
- 前川喜久雄(1997)「日韓対照音声学管見」『日本語と外国語との対象研究Ⅳ』国立国語研究所. p.174.
- 金子峻(1983)「우리말 로마자 표기법의 근본문제와 그 해결 방안」(『韓国語のローマ字表記法の根本的な問題とその解決案』原文は韓国語)『語文研究第12輯』語文研究会. p.36.
- 権暎愛(2010)「일본어식 외래어를 통해서 본 일본어 한글 표기법 재고」(『日本語式外来語を通して見た日本語のハングル表記法再考』原文は韓国語)『日本研究第46号』韓国外国語大学校. p.342.
- 李熙昇・安秉禧(1994)『고친판 한글 맞춤법 강의』(『改正版ハングル綴り方法講義』原文は韓国語)新丘文化社. p.331.
- 高秀晩(1999)「현행 일본어 한글 표기법의 문제점과 그 개선 방향」(『現行日本語のハングル表記法の問題点とその改善方向』原文は韓国語)『日語日文学研究第39輯』韓国日語日文学会. p.24.

<辞書類>

- 『국어학연감 1997』(1997) (『国語学年鑑 1997』原文は韓国語) 韓国, 国立国語研究院, 編集部編

Hangul writing system suitable for Japanese language

Takanori HIRAKI

Division of International Center

Kurashiki University of science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2013)

The Japanese language and the Korean language are completely different in phonology. Therefore, the present Hangul notation has difficulty to express several Japanese sounds as they are. The author tried to establish a new Hangul notation that reflects the characteristics of Japanese phonological system so that the original Japanese pronunciation can be reflected as faithfully as possible.

Hangul notation, which unconditionally accepts a principle of Japanese language's consonant pronunciation as it is, will cause a great confusion. Therefore, the author thinks that Japanese rupture voiced Explosion vocal sound should be noted as Korean soft sound, and Japanese voiceless sound be noted as Korean aspirate voiced sound.

A syllabic nasal in Korean language appears as an allophone of consonants such as ㄴ (n), ㅁ (m) and ㅇ (ng). However, these sounds do not conflict phonemically in Japanese.

It is not necessary to distinguish these allophones intentionally in Japanese. A double consonant appears as an allophone of consonants such as [k], [t], [p], [s] and [ʃ]. The author think that it is not necessary to write it for the same reason as in the case of the syllabic nasal.

Each Japanese long sound has the same sound length as the preceding vowel. A long sound symbol is intentionally expressed in the Japanese writing. The long sound works as an important feature in order to distinguish word meaning.

A long sound in Korean language is included in a syllable. The existing Hangul writing system has no separate system to make a long sound symbol visible. The Hangul description system is not suitable to describe the Japanese long sound. Various different Japanese words are apt to be written in the same Hangul spelling.

The author's suggestion is shown as Table 9.